

中学生における認知的・構造的ソーシャルキャピタルと精神的適応の関係

市来百合子²、瓜生淑子¹、立石麻衣子²、渋谷真樹¹、大久保千恵²、
藤田美佳²、板橋孝幸¹、橋崎頼子¹、井深雄二¹、生田周二²

*1 奈良教育大学 学校教育講座

*2 奈良教育大学 次世代教員養成センター

Relationship of Cognitive and Structural Social Capital and Stress Responses of Junior High School Students

Yuriko ICHIKI², Toshiko URYU¹, Maiko TATEISHI², Maki SHIBUYA¹, Chie OKUBO²,
Mika FUJITA², Takayuki ITABASHI¹, Yoriko HASHIZAKI¹, Yuji IBUKA¹, Syuji IKUTA²

*1 Department of School Education, Nara University of Education

*2 Teacher Education Center for Future Generation, Nara University of Education

要旨：中学生を対象として認知的ソーシャルキャピタル（以下認知的SC）、および構造的ソーシャルキャピタル（部活動を含む学校内活動と学校外活動への参加）が、ストレス反応を抑制するかについて男女別に検討した。また近年の中学生における情報機器の普及に伴い、ICT機器使用とSCの関連を探索的に調べた。認知的SCに関して、「社会的ルールの遵守」「社会的信頼感」「互恵性」の3因子が抽出された。男子のみ学校内外の活動への参加と「互恵性」に正の相関が認められた。女子は、「互恵性」の得点が有意に高く、学校内の活動に積極的に参加していた。全てのストレス反応の抑制に、構造的SCよりも認知的SCの下位因子が有意に関連があった。またパソコンと携帯（メール）の不利用群が認知的SCにおいて有意に高い得点が認められた。認知的SC項目の「社会的望ましさ」による評定の問題、中学生の生活実態に合った構造的SC項目の設定、SCとストレス反応に関する性差、SCとインターネット使用の影響に関する問題について検討された。

キーワード：社会関係資本 social capital 中学生 junior high school students
ストレス反応 stress responses

1. はじめに

社会関係を通して、コミュニティや個人に蓄積される資本についての概念として「社会関係資本（Social Capital（以下SC）」があり、近年多岐に渡る研究領域で展開をみせている。中でも公衆衛生学との関連で活発に議論され、人と人とのつながりが感じられる豊かな地域は、健康を促進し、有病率を抑えることができる概念として期待がよせられ、近年日本でも多く論じられるようになってきた。（木村，2008；本橋・金子・山路，2005；儘田2010；カワチ，2008）。

その定義や測定については、未だ諸説あり一定の決着をみていないのが現状である。特に、日本の子どもたちが発達過程でどのように社会環境や地域の資源を認知し、SCを育んでいくのか等の研究はまだ少なく、その知見は非常に限られている。

その中で近年、特に注目されるのが、朝倉（2011）が日本で初めて中学生のSCの測定に向けて行った大規模調査である。中学2年生を対象に、自由記述を求

め、そこから地域環境の質を問う項目を作成し、さらに個人レベルのSC、すなわち認知的SCと構造的SCに係わる項目を抽出した。前者は「社会的信頼感」「互恵性」「社会規範、社会関係のルール」の3つの因子を想定し、後者は、日本の中学生に当てはまりやすい社会活動を想定して構造的SCの指標とした。その結果、地域環境の質の一部と個人の認知的SCが抑うつ症状と関連があること、そして、認知的SCの低い子どもほど、地域環境が好ましくないことに影響をうけやすく、精神的健康が損なわれることを見出した。

また構造的SC、すなわち多くの社会活動に参加することが、必ずしも精神的な健康へ導くものではないという結論が示され、むしろ活動内容やそこでの本人にとっての学びの質が重要であると論じている。

SCとは、幼少期における家庭内での基盤的な人間関係の中で生まれ、小学校時代にかけては、近隣の様々な大人とのかかわりを経て醸成され、さらに小中学校での教科学習で「社会」を学び、学校や地域での実体験を統合して取り込まれていくものと推察される。

日本の中学校の場合を考えると、実際の生徒たちの行動範囲はある程度居住する地域に限定されるものの、岡正・田口（2012）の結果にあるように、地域の人との交流、またボランティアなどの社会参加は小学生と比べると減少すると思われる。これは、学校の中や放課後の部活動など特定の場所で1日の大半を過ごす彼らの生活スタイルを考えると当然の結果であろう。また放課後に学校外の活動を行なったとしても、それは塾やスポーツチームなどの特定の場所での継続的な目的を持った参加である。

そのようなそれぞれの場所で、日本の中学生は様々な集団活動を通して、対人的なキャピタル＝すなわち人との関係性を形成する力を内面化したリソース（資源）として取り込んでいくのがその実態ではなかろうか。

朝倉（2011）は、中学生時代の社会参加を学校内の活動と地域のお祭りやボランティアなどを合計して評価得点とした。しかし中学校生徒にとって、学校外と学校内活動の意味は異なると思われ、本研究では学校外と学校内活動に分類し、それらの参加の程度が認知的SCとどのように関連しているのかを検討する。また中学校においては部活動の意義が大きく、運動部では休日の過ごしかたにも大きく影響する。従って、部活動への参加の有無も学校内活動の中に入れることとする。

また中学生を対象としたSCの測定は、緒に就いたばかりであり、今回使用する朝倉（2011）の「認知的SC」項目について確認的因子分析を通して検討する。本研究で扱うSCの概念は、幼少期より蓄えられた資源（リソース）として内面化された「認知的SC」および実際の中学生の活動実態である「構造的SC」に限定し、それらの測定から検討を進める。

中学生の精神的適応については、先行研究から男女の差があることが明らかとなっており、中学生においては、女子の方が男子よりもストレス反応（抑うつ傾向）が高いという結果がある（岡安・嶋田・坂野，1992, Ge, et al., 2001）。榎本（1999）によると、思春期において女子は、友人に対して悩みを打ち明けてくれることや、共感的な態度でいてくれることを期待し、男子よりも依存傾向が高い。このように思春期においては、対人行動や態度には性差があると思われ、それは認知的なSCにも影響を与えられられる。そこでSCがどのようにストレス反応に反映するかについて男女別に検討する。また身体的ストレス反応、不機嫌・怒り、無気力なども含めて包括的に精神的適応を測定するためにPSIを用い、抑うつ以外のストレス反応も検討する。

ところで、近年の若者の社会とのつながりは、インターネットを通して行われるようになってきた。総務省（2014）によると、中高生（13-19歳）においても、インターネットの利用は増加し、平成24年から平成

25年の1年間を見ても、携帯情報端末（PDA）が激減し、スマートフォンやタブレット型端末が急速に拡大し、SNSに参加している中学生も少なくない。インターネットへのアクセスは、物理的な時空を越えたひとつの社会参加の形ではあるが、それが直接中学生の個人レベルのSCの育成にどのように関係があるかについての研究はまだ為されていない。

実際、子どものSC研究の論点のひとつは、どこまでを、彼らにとっての社会やコミュニティとみるかという問題である。Morrow（2000）は、若者にとっての、「コミュニティ」とは、物理的な地理的場所というよりも、学校の友達、都市の中心部や道、友達や親戚の家などから成る「バーチャルなコミュニティ」であると指摘した。ネット社会へのアクセスも、中学生にとってはその1つであり、放課後や休日に、「懐中にある」社会やコミュニティと接触することもSCの形成に影響を与えるのではないだろうか。近年の急激な情報機器の発達には、子どもたちのSCの獲得過程をより複雑なものにしていると推察される。

本研究では、対象中学生の生活実態を知る目的で、ICT機器の使用について尋ねており、メール、パソコンとの接触が中学生の認知的SCにいかに関係を及ぼすかについて予備的に探索する。

尚、本研究の調査対象生徒は、大学の附属中学の生徒であり、多くは小学校から引き続き通学しており、校区が広域に渡っているために様々な特徴を持つ地域から通学している。従って、SCの重要概念である「居住環境の質」による影響の機会を均質に受けていないため、その個人差は相殺されていると考えられよう。また上記に述べたように、中学生の生活の実態を考えると、幼少期より蓄えられた内面化されたリソースとしての認知的な側面と実際の活動である構造的SCを測定することが重要ではないかと考える。そこで本研究では上記に示したように、性差を含めて1) 精神的健康と認知的および構造的SCの関係、2) 認知的SCと構造的SCの関連、および3) インターネット使用とSCの関連について検討する。

2. 方法

2. 1. 調査対象と方法

無記名による質問紙法で、2013年10月に、A中学校1年から3年までのクラスごとに担任が調査票を帰りの会に配布し、質問項目を読み上げる形で実施し、回収した。

全回答数410名のうち、回答に不備のあったもの、欠損値のあったものを除き、有効回答は407名で、学年と男女別の回答数は以下のとおりであった。

1年114名：男子56名、女子58名、2年153名：男子74名、女子79、3年140名：男子71名、女子69名。

2. 2. 質問紙の内容

2. 2. 1. ソーシャルキャピタルの測定

朝倉 (2011) が作成した個人レベルの認知的SCと構造的SC項目を使用した。前者は、他者への一般的信頼と対人的信頼を表す「社会的信頼感」、友達と助け合う規範を表す「互恵性」、家庭や学校など身近な社会で共有される価値である「社会規範、社会関係のルール」から成る13項目である。それぞれの項目について、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法で尋ねた。

構造的SCの尺度構成に関しては、朝倉 (2012) の構造的SCを表す7つの活動領域 (以下の1) ~7) を参照) について、「過去1年のうちにそれぞれの活動をしたことがあるかないか」の2件法で尋ねた。

構造的SCの測定は、以下の表のとおり、学校内・学校外活動ごとに得点を算出した。学校内活動は、1) 生徒会の委員やクラス委員 2) 体育祭、学園祭、林間学校などの学校行事の運営や手伝いに加えて、本研究で独自に中学生にとって重要と考えた、3) 部活動への参加から成る0~3点である。学校外活動は、4) 地域の祭り、バザー等の行事や活動、5) ボーイ (ガール) スカウト・ボランティアなど、6) 学校以外でのスポーツ部活動やサークル活動、7) 趣味や習い事、8) 塾の0~5点で算出した。

表1. 構造的ソーシャルキャピタル

構造的SCの測定	
学校内活動	1) 生徒会の委員やクラスの委員
	2) 体育祭、学園祭、林間学校など学校行事の運営や手伝い
	3) 現在クラブに参加しているかどうか
学校外活動	4) 地域の祭り、バザー等の行事や活動
	5) ボーイ (ガール) スカウト・ボランティアなど
	6) 学校以外でのスポーツクラブやサークル活動
	7) 趣味や習い事
	8) 塾

2. 2. 2. 精神的適応尺度

精神的適応の指標として、PSI (パブリックヘルス・リサーチセンター版ストレスインベントリ) (坂野, 岡安, 嶋田, 2007) のストレス反応 (心の不調) を尋ねる16項目を使用した。ストレス反応は、「身体的反応」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無力感」の4つの下位尺度 (各4問) から構成され、各下位尺度ごとに標準得点を算出した。PSIは、著作権所有団体から使用許可の承諾を得た。

2. 2. 3. インターネットとの接触時間

ICT機器との接触を測定するために、平日に1) パソコンをする 2) 携帯電話で通話やメールをするという項目に対して、1日に何時間くらいするのかを問うた。非所持、全然しない、30分以内、1時間くらい、2時間くらい、3時間以上の5件法で尋ねた。非所持を除き、全然しないと応えたものを「不使用群」、2時

間くらいもしくは3時間以上と応えたものを「高使用群」とした。

本研究の統計的分析は、IBM SPSS Statistics Ver22を用いて行った。

3. 結果

3. 1. ソーシャルキャピタルについて

認知的SCの因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った結果、天井効果を示した「私の家族を信頼している」「近所の人によく挨拶をしている」「ゴミのポイ捨てや落書き、自転車の二人乗りなど、マナーを守らないことがよくある」の3項目と、共通性の低い「私の友達はときどき私を裏切る (逆転)」と「注意していないと他の人は私を利用しようとする」を除いたところ、3因子が抽出された (表2)。第1因子は、「社会的ルールの遵守」第2因子は「社会的信頼感」、第3因子は「互恵性」と命名し、内容的に朝倉 (2011) を支持する結果となった。それぞれの α 係数は、0.7以上と良好な値であった。

Amoss22.0を用いた確認的因子分析により妥当性を検討したところ、因子相関の適合度は、GFI = .96, AGFI = .91, CFI = .944, RMSEA = .081, AIC = 99.30であり、まずまずの適合度指標が得られた。

表2. 認知的SCの因子分析結果

n=410	I	II	III
A.社会的ルールの遵守 ($\alpha=.68$)			
クラスや学校で決められた約束事をよく守っている	.79	.00	-.02
家のルールや決められたことをよく守っている	.63	.03	-.04
友達との約束をよく守っている	.47	-.08	.23
B.社会的信頼感 ($\alpha=.70$)			
世の中の人はいたいい信頼できる	-.10	.74	.06
近所に住んでいるたいい人は信頼できる	.02	.63	.02
先生を信頼している	.31	.50	-.07
C.互恵性 ($\alpha=.72$)			
友だちは私が悩んだり、こまったりしているときに、よく助けてくれる	-.11	.08	.85
私は友だちが悩んだり、困ったりしている時に、よく助けている	.20	-.04	.63
寄与率 (%)	40.92	13.60	13.05
因子間相関	I	.55	.45
	II		.50
	III		-

男女別の認知的SCの3因子の各下位尺度得点と、実際に様々な活動に参加しているかどうかの指標である構造的SC得点の相関係数を表3に示す。男子で「社会的信頼感」と「学校外活動への参加」、「互恵性」と

「学校内活動への参加」「学校外活動への参加」に弱いながら有意な相関があるのに対して、女子では無相関であった。

表3 男女別認知的SCと構造的SCの相互相関

	認知的SC			構造的SC	
	社会的ルールの遵守	社会的信頼	互恵性	学校内活動への参加	学校外活動への参加
認知的SC	1	.49**	.50**	.05	.17*
社会的信頼	.44**	1	.47**	.08	.09
互恵性	.28**	.39**	1	.14*	.23**
構造的SC	.09	.09	.07	1	.25**
学校外活動への参加	.00	.03	.00	.18**	1

** $p < .01$, * $p < .05$

(右斜め上は男子の相関係数、左下は女子の相関係数)

男子：n = 198, 女子：n = 205

3. 2. ソーシャルキャピタルとストレス反応の性差

男女差の検討を行うために、認知的SCの各下位尺度得点についてt検定を行った結果を図1に示す。

認知的SCの3因子中、「互恵性」に関して女子のほうが有意に高得点であった ($t = -3.13$, $df = 403$, $p < .01$)。また構造的SCに関しては、「学校活動への参加」に関して、女子のほうが有意に参加度が高かった ($t = -2.65$, $df = 402$, $p < .01$)。

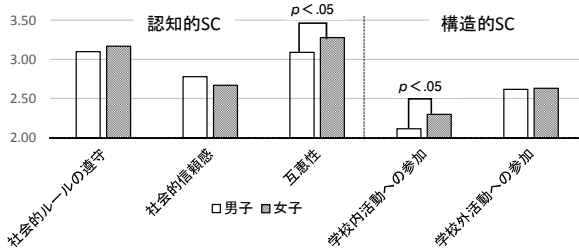


図1. 男女別認知的および構造的ソーシャルキャピタル得点

ストレス反応に関しては、「抑うつ・不安」得点の平均値が男女それぞれ、3.03 (SD = 3.00), 3.79 (SD = 3.47) であり、先行研究の示すように女子の方が高かった ($t = -2.34$, $df = 405$, $p < .01$)。それ以外のストレス反応因子では性差は認められなかった。

3. 3. ソーシャルキャピタルがストレス反応に与える影響

ストレス反応および認知的SCの各下位尺度得点、構造的SCを用いて重回帰分析を行った結果を表4に示す。いずれのストレス反応も構造的SCの標準偏回帰係数は有意ではなかった。それに対して、全てのストレス反応は男女ほぼ同等に認知的SCの下位因子によって説明されることが示された。また認知的SCの下位因子の標準偏回帰係数が全て負の値を示しているのは、認知的SCが高得点であるほど、ストレス反応を抑えることができることを示している。男子においては、「社会的ルールの遵守」が「無気力」の抑制に対しての標準偏回帰係数のみが有意であった一方、女子では、「社会的ルールの遵守」は「不機嫌・いかり」以外の全てのストレス反応に対して、有意な負のβの値が得られた。決定係数は、.1から.3で、性差はみられなかった。

3. 4. パソコンとメールの使用時間と認知的SC

パソコンと携帯やスマートフォン(メール)といったICT情報機器の使用時間における認知的SCの3因子の下位尺度得点について比較を行った。

その結果、パソコンを、持っていないわけではないが、「平日に全くしない」と答えた「不使用群」のほうが、「2時間くらいまたは3時間以上使用する」と答えた「高使用群」よりも、「社会的ルールの遵守」「互恵性」において有意に高い得点を示し、携帯(メール)使用に関しては、同様に、「不使用群」の方が、「高使用群」よりも「社会的ルールの遵守」と「社会的信頼感」において有意に高い得点が認められた(表5)。

表5. パソコンとメールの使用時間と認知的SC

	パソコンの使用時間			メール使用時間		
	低群 n=108 M(SD)	高群 n=38 M(SD)	t	低群 n=128 M(SD)	高群 n=86 M(SD)	t
認知的SC						
社会的ルールの遵守	3.21(.52)	2.94(.51)	2.77 **	3.22(.52)	2.99(.52)	3.10 **
社会的信頼感	2.77(.71)	2.61(.68)	1.24	2.85(.67)	2.48(.66)	3.90 ***
互恵性	3.28(.58)	3.04(.71)	2.00 *	3.20(.56)	3.22(.60)	-.20

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表4. ストレス反応を目的変数とした重回帰分析の結果

説明変数	(男子) (n=190)								(女子) (n=193)							
	身体的反応		抑うつ		不機嫌・いかり		無気力		身体的反応		抑うつ		不機嫌・いかり		無気力	
	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r
認知的ソーシャルキャピタル																
社会的ルールの遵守	-.15	-.32 ***	-.03	-.30 ***	.00	-.30 ***	-.22 **	-.36 ***	-.17 *	-.32 ***	-.19 **	-.38 ***	-.11	-.31 ***	-.32 ***	-.40 ***
社会的信頼感	-.19 *	-.32 ***	-.30 ***	-.43 ***	-.33 ***	-.45 ***	-.23 **	-.36 ***	-.37 ***	-.32 ***	-.30 ***	-.47 ***	-.30 ***	-.44 ***	-.22 **	-.35 ***
互恵性	-.16	-.31 ***	-.27 **	-.40 ***	-.28 **	-.42 ***	-.04	-.27 ***	-.01	-.31 ***	-.20 **	-.38 ***	-.22 ***	-.38 ***	-.03	-.16 **
構造的SC																
学校内活動への参加	.15	.13	.07	.01	.10	.02	-.01	-.06	-.01	.08	.06	.02	.03	.00	.07	.04
学校外活動への参加	.05	.13	.04	-.04	-.02	-.82	-.06	-.13	.11	-.08	.04	.06	.10	.10	.01	.03
R2乗	.17 ***		.24 ***		.27 ***		.18 ***		.23 ***		.29 ***		.26 ***		.20 ***	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, rは単相関係数

4. 考察

4. 1. 中学生としてのソーシャルキャピタルと性差

ソーシャルキャピタルの因子分析の結果、朝倉(2011)の構成した因子とほぼ同様の結果となった。異なる点は、下位項目の「友人との約束を守っている」が本結果では「互惠性」の中ではなく、「社会的ルールの遵守」として示され、中学生が「守っている」という同じ文尾を持つ他の項目に影響されて評価したことを示唆している。また朝倉の使用した13項目のうち、3項目が天井効果を示したが、中でも「ゴミのポイ捨てや落書き、自転車の二人乗りなどのマナー違反(逆転)」「近所の人への挨拶」に対しては、ほとんどが「全くあてはまらない(よくあてはまる)」と答えており、道徳的な是非のニュアンスが明白すぎて「社会的な望ましさ」による評定を誘発した可能性がある。同じことが、「私は家族を信頼している」にもあてはまると思われた。しかしこれらの項目は地域との接触や規範、そして基本的な信頼について問うSCの測定には重要な項目であり、今後は質問内容や提示の工夫が必要なのではないかと思われた。

男女別の認知的SCと構造的SCの関係について、男子が「学校内活動への参加」「学校外活動への参加」と「互惠性」に弱いながら有意な相関があるのに対して、女子では無相関であった。また実際の学校内・学校外(地域)への参加行動では、女子のほうが積極的に学校内での活動に参加していることが示されている。このことは、男子では、実際の活動体験から、互惠性のような持ちつ持たれつといった「お互い様」の意識が育まれる可能性がある一方、女子の場合は、学校内外の活動に積極的に参加しても、必ずしも自分の友達との互惠性には関係がないことが示された。和田(1966)は、中学生男子は友人を頼ろうとしない、いわば独立的な付き合い方をすることを指摘しており、女子ほど特定の人間関係にこだわらずつきあえるために、社会活動での経験が凡化され、人間関係一般に影響を与えて互惠性が獲得されるのではないかと考えられる。他方、表3から女子の場合の互惠性の高さが伺えるが、前述したように女子は友人に依存関係を求めるため、人間関係が特定化され、学校内外の生徒会や地域のある意味オフィシャルな活動をいくら行っても、それが女子の友人への互惠性には影響しないのかもしれない。

今回の研究では構造的SCは、学校内外の活動への参加の有無による得点を合計したが、それぞれの活動内容は、SCの育成という観点から考えてみると多様な要素を内包している。例えば学校外の活動には、地域の祭りの手伝いもあれば、勉強を主体とする塾通いも含まれている。また、学校の部活動は入らず地域のスポーツチームに入る選択肢もあり、週ごとの頻度や休

日の使い方もそれぞれ異なっている。それぞれの活動で、何を期待され、本人がどのように考えて行動し、そのコミュニティで何を求めるかは様々であろう。今後は、中学生の生活実態に合わせて、活動の質や頻度、そして本人にとっての意味などを反映できるような構造的SCの指標を検討していくべきではないかと考える。

4. 2. ソーシャルキャピタルと精神的健康の関連

重回帰分析の結果(表3)から、認知的SCが4つのストレス反応に対して抑制的に働く可能性が示唆された。決定係数は大きな値ではないものの、これは中学生においては、認知的SCが精神的健康に好影響を与えるという朝倉(2011)の結果を支持する結果であった。

性差が目立ったのは、社会的ルールを遵守するという意識がストレス反応を抑制する点についてである。女子は、家庭や学校での守りごとを守っていくことが、概ねストレス反応の抑制につながるのに対して、男子では、それによってストレス反応が無気力を除いて軽減されるわけではないことが示された。大人社会への反抗を特徴とする思春期を考えると、男子にとって社会的ルールを守るという道徳的な行為が、ストレスフリーな状態を導くわけではないことは理解し易い結果であった。一方女子は、人間関係に敏感であるが故に、むしろ規則破りは、目立つ存在となり、違和感を持つ可能性があり、ストレス反応を誘発するのではないだろうか。

構造的SCとストレス反応には関連が示されず、朝倉(2011)同様、学校内外を含む活動への積極性がストレス反応に影響するものではないことが追証された。このことは、前述したように構造的SCの測定の問題とも関連していると思われ、参加の有無だけではなく、活動内容や頻度、個人にとっての意味づけを質的な調査とともに明らかにしていくことが重要であろう。

4. 3. パソコンとメールの使用時間とソーシャルキャピタル

パソコンと携帯(メール)の使用時間による認知的SCの比較において、携帯(メール)を所持はしているが使用していない生徒(不使用群)は、「社会的ルールの遵守」と「社会的信頼感」で有意に高い結果となり、同様にパソコンの不使用群は高使用群に比して、「社会的ルールの遵守」「互惠性」で、有意に高い結果となった。両方で結果の出た「社会的ルールの遵守」に関しては、携帯やパソコンの情報機器の使用を巡って、家庭においてのルールを親子で取り決め、それが子どもにとっては、家庭内での1つのルールの遂行経験となり、社会的規範への遵守に展開していくのではないかと想像できる。

また携帯(メール)の不使用が、「社会的信頼感」を高めるという結果から、平日の放課後に、メールの

やりとりを一切しない生徒たちは、それを多くする生徒よりも、何らかの体験によって社会的信頼感を高める体験していることが予想される。それは、家族や塾での友人、先生などの他者との対面的コミュニケーション (Face to Face communication (FTF)) かもしれないし、あるいは自宅での学習、本やテレビなど何らかの情報の入力体験かもしれない。逆に携帯 (メール) の使用時間の長い生徒に「社会的信頼感」が育まれていないのは、そこに何らかの阻害要因が想定されるからであろう。

今回は、探索的に調査を行ったので、詳細な言及は避けたいが、今後は、さらに中学生のネットとのつながり方について、誰と、どのように、いつつながるのか、ネット社会の情報モラルをどのように体験しているかなど詳細な調査が必要となるであろう。

5. 本研究の限界と今後に向けて

本研究は、中学生の認知的SCと構造的SCについて朝倉 (2011) の測定した項目を用いて、性差も含めた精神的健康との関連を検討した。その結果、朝倉の結果にあるような「抑うつ」だけでなく、それ以外のストレス反応にも、男女ほぼ関係なく、認知的なSCが寄与するという結果となった。今後は、本研究で明らかとなった認知的SC項目における「社会的望ましさ」の評定の問題を克服し、中学生の生活実態に合った構造的SC項目を設定することによって、それらの育成についてのさらなる議論が可能となるであろう。

また今回は、研究対象生徒の特性から、「地域環境の質」についての検討は行わなかったが、今後はその要因も組入れて多様な集団との比較から検討することが重要である。

さらに今回は、予備的に中学生のインターネットとの接触体験とSCの獲得について検討したが、急激な普及の中で、若者がこれらの機器を通して社会と接触する機会はますます増えていくことから、今後この分野に関する研究は急務であると思われる。

謝辞

ご協力いただいたA中学校の教職員および生徒に感謝申し上げます。

*なお、本研究は、平成25年度奈良教育大学学長裁量経費 (生田周二代表) 「奈良県の小中学校のストレス反応の規定要因に関する調査研究」によって行われた調査の結果である。

6. 参考文献

- 1) 朝倉隆司 2011 中学生における近隣の地域環境の質、個人レベルのsocial capitalと抑うつ症状との関連日本公衛誌, 58 (9) 754-767.
- 2) 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 3) 藤澤由和・濱野強・小藪明生 2007 ソーシャルキャピタル概念の適応領域とその把握に関する研究 新潟医福誌, 7 (1), 26-32.
- 4) Ge.X., Conger, R. D., & Elder, G. H. Jr. 2001 Pubertal transition, stressful life events, and the emergence of gender differences in adolescent depressive symptoms. *Developmental Psychology*, 37, 404-417.
- 5) イチロー・カワチ, S. V. スプラマニアン, ダニエル・キム 2008 ソーシャルキャピタルと健康 日本評論社
- 6) 木村美也子 2008 ソーシャルキャピタルー公衆衛生学分野への導入と欧米における議論よりーJ. Natl. Inst. Public Health, 57 (3), 252-266.
- 7) 儘田徹 2010 日本におけるソーシャルキャピタルと健康の関連に関する現状と今後の展望 愛知県立大学看護学部紀要16, 1-7.
- 8) 本橋豊・金子善博・山路真佐子 2005 ソーシャルキャピタルと自殺予防 秋田県公衆衛生学雑誌, 3 (1), 21-31.
- 9) Morrow, V. 2000 Dirty looks and trumpy places in young people's accounts of community and neighbourhood: implications for health inequalities. *Critical Public Health* 10 (2) : 141-152.
- 10) 岡正寛子・田口豊都 2012 子どもの発達に焦点をあてた地域の役割ー子どもの認識するソーシャルキャピタルの測定からー川崎医療福祉学会誌, 21 (2), 184-194.
- 11) 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究, 5, 23-29.
- 12) Putnam, R. D. 哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造 (Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy) (河田潤一, 訳). 東京: NTT出版, 2001; 200-231.
- 13) 総務省 2014 平成25年通信利用動向調査の結果 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/>
- 14) 山脇彩・小倉正義・濱田祥子・本城秀次・金子一史 2012 Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya Univ. 59, 53-60.
- 15) 和田実 1966 同姓の友人関係期待と年齢・性・性別役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.